日本の石橋を守る会
会報97号(通算)
2020年9月29日発行
題字揮毫　片寄 俊秀

日本のいしばし

「通潤橋」＝熊本・山都町
放水再開　4年3カ月ぶり

復旧工事が終わり放水が再開された国指定重要文化財の通潤橋＝熊本県上益城郡山都町、2020年7月21日　中村まさあき撮影

熊本県上益城郡山都町の通潤橋（国指定重要文化財）が復旧し本年7月21日、4年3カ月ぶりに放水が再開された。

通潤橋は1854（嘉永7）年、農業用水を台地に送るために建設された江戸期最大の石造水路橋。橋の上部に設置された水を送る3本の石管の接合部（目地）には漏水を防ぐために漆喰（しっくい）が詰められている。

2016（平成28）年4月の熊本地震では、その通水石管の目地が破損した。そのため復旧工事が進められていたが、18年5月の大雨で上流右岸側の壁石93石が崩落。その後92石が回収された。

学識経験者や技術者、地元代表者らによる各種の専門部会が繰り返し開かれ、19年3月から復興事業が始まり、復旧工事を地元の㈱尾上建設（会長の尾上一哉氏は本会の技術部長）が担当した。8月から崩落部に近い通水石管1本（37石）と、崩落した壁石の1段下の列までが解体され、石材を積み直す作業が行われた。

工事の過程では裏築（うらつき）と呼ばれる壁石の内部構造が判明（会報95号で紹介）したほか、壁石の所々に奥行き95㌢ほどの特に長い石材（長尺石）が使用されていたことも分かった。

復旧工事では3次元画像計測などを使って回収した壁石の位置を特定し、再使用不可能とみられた4石については新材が使用され、劣化していた通水石管1石も新材で作製、交換された。また、今後の壁石のはらみ出し防止のため、編み目状のシートが裏築に設置されている。

本年2月ごろに通水石管の目地漆喰詰め、3月に石管横の被覆土の埋め戻し作業が終わって、4月19日に関係者のみによる「通潤橋復興事業竣工式」と「記念放水」を行う予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言の発令を受けて式典は7月21日に延期された。

通潤橋史料館の石山信次郎館長（会員）は記念放水の日、「やっとこの日を迎えられた。すでに県内の小学校を中心に多くの見学予約が入っている。まだ熊本地震前の状況には及ばないが、感染拡大に注意して来館者に対応していきたい」と喜びを語った。

放水の予定日時は、山都町ホームページの「放水カレンダー」で確認できる。（広報部）

中面の案内
2面　「令和2年7月豪雨」で石橋にも被害が
4面　熊本・八代市「石工の郷」が日本遺産に
6面　「中国の古橋」撮影記その4（榊 晃弘）
7面　「温故石拱記」岩永三五郎・白秋編（上塚尚孝）

大河川が氾濫した「令和2年7月豪雨」石橋にも広域で被害が

「令和2年7月豪雨」は各地で甚大な被害をもたらした。大河川が氾濫する記録的な大雨が降ったが、多くの石橋は流失することなく持ちこたえた。しかし損傷を受け、今後の保存に課題が生じた石橋もある。被災地の道路はいまだに通行が制限されていて被害の全容を把握するには時間を要する。今回は被災の速報として熊本県の人吉市、湯前町、津奈木町、八代市、大分県日田市、福岡県八女市などの石橋を紹介する。（広報部）

写真提供／中村まさあき、尾上一哉(*1)、上塚寿朗(*2)

「義人橋」は両岸の取付護岸から壁石に続く石垣が崩落し、右岸側に穴が空いた
＝熊本県人吉市古仏頂町

「石水寺門前眼鏡橋」は高欄の一部が崩落
＝熊本県人吉市下原田町、市指定文化財

川は氾濫したが分水路で守られた「岩本橋」
＝熊本県荒尾市、県指定文化財

「古町橋」は上流右岸側の取付護岸の石垣が崩落
＝熊本県球磨郡湯前町

国宝・青井阿蘇神社前のハス池に架かる「禊（みそぎ）橋」は高欄が崩壊
＝熊本県人吉市上青井町

7月の豪雨は各地の石橋に被害をもたらした。熊本県南部を流れる球磨川が氾濫し、流域の人吉市や球磨郡球磨村では水害が起きた。国宝・青井阿蘇神社前のハス池に架かる「禊（みそぎ）橋」（人吉市上青井町）は、朱塗りのコンクリート製高欄が崩壊。1854（嘉永7）年架設と人吉地域で最も古い「石水寺門前眼鏡橋」（人吉市下原田町、市指定有形文化財）は、右岸側の高欄の一部が崩落した。

球磨川に注ぐ胸川の支流、寒川に架かる「義人橋」（人吉市古仏頂町）は、取付護岸から壁石に続く石垣が損壊。右岸側に空いた大きな穴が洗掘のすさまじさを物語る。路面は通行禁止の状態。橋のすぐ上流の川の堤防も両岸が崩壊した。文化財の指定を受けていない義人橋は、現役の農業用道路だった。

球磨郡湯前町は球磨川の上流域に位置するローカル線「くま川鉄道」の終着駅がある町で、鉄道は被災して現在は不通の状態。球磨川支流の都川に架かる古町橋は、上流右岸側の取付護岸の石垣の一部が崩落した。護岸に自生した木が成長して根を伸ばし、それが石垣の損傷に影響したようである。

熊本県南部の津奈木町の山あいにある「金山眼鏡橋」（津奈木町大丸、町指定有形文化財）は、壁石の一部が流失した。がれきの散乱状態から水が路面を洗っ

令和2年7月豪雨

気象庁が 8 月 11 日に発表した速報によると、活発な梅雨前線が九州付近から東日本にかけて停滞し記録的な大雨を降らせた。九州南部と北部地方、東海地方、東北地方の多くの地点でそれぞれ 24、48、72 時間降水量が観測史上 1 位の値を超え、全国の観測地点の降水量の総和と 1 時間降水量 50 ミリ以上の発生回数が共に 1982 年以降で最多となった。

内閣府のまとめによると、この大雨により熊本県南部を流れる球磨川、福岡県南部を流れる筑後川、岐阜県を流れ木曽川に注ぐ飛騨川、島根県と広島県を流れる江の川、山形県を流れる最上川などの大河川が氾濫し、土砂災害や浸水により甚大な人的・物的被害があり、鉄道橋や道路橋も数多く流失した。そのほか竜巻や突風による被害も確認されている。

7 月の大雨は災害の経験と教訓を後世に伝えるため、「令和 2 年 7 月豪雨」と名称が定められた。

輪石のみの姿で残っていた大分県内現存最古の「筏場（いかだば）目鏡橋」がついに流失＝大分県日田市、県指定文化財だった

「尾久保橋」（本谷橋）はアーチ基礎が沈下＝福岡県八女市上陽町 (*1)

「高原橋」は上流右岸側の石垣が崩落＝熊本県八代市泉町 (*2)

「赤松第一号眼鏡橋」は上流側の高欄と壁石の一部が路面に崩落＝熊本県八代市二見赤松町、市指定文化財、日本遺産認定

「金山眼鏡橋」は壁石の一部が流失＝熊本県葦北郡津奈木町、町指定文化財

たとみられる。

本年度「日本遺産」に認定【4面に関連記事】された熊本県八代市の二見川に架かる「赤松第一号眼鏡橋」（八代市二見赤松町、市指定有形文化財）は、上流側の高欄が路面に崩れ壁石が一部が損壊した。山間部の栗木川に架かる「高原（たこら）橋」（八代市泉町）は、上流右岸側の取付護岸の石垣が崩落した。

一方、熊本県北部の関川に架かる岩本橋（荒尾市上井手）は、20メートルほど上流の堤防が崩れたが、橋は分水路によって守られ損壊を免れた。

福岡県八女市の「尾久保橋」（本谷橋、八女市上陽町）は同橋は路面拡幅のため隣に石橋が併設されている構造だが、尾上一哉技術部長の被害調査報告書によると、2つのアーチの基礎部分が断裂し段差が生じている。基礎が沈下して下流方向へアーチが10センチメートル以上移動し、アーチ下部の石材に長い亀裂が入り、壁石も損傷した模様。

大分県では県内現存最古の石橋だった「筏場（いかだば）目鏡橋」（日田市川下、1806年架設、県指定有形文化財）が流失した。2012年の九州北部豪雨により壁石が崩落して輪石だけの姿になり、17年の豪雨を輪石だけの状態で持ちこたえたが、この7月の豪雨でついに姿を消した。

被災石橋は保存の危機にある。

熊本県八代市の石造文化財が「日本遺産」に認定される

八代を創造（たがや）した石工たちの軌跡
～石工の郷（さと）に息づく石造りのレガシー～

1900（明治33）年に築造された10連アーチの干拓樋門「旧郡築新地甲号樋門」。アーチの部分にレンガが使用されている
＝八代市郡築三番町

天草産の砂岩が使用されている「鑑内（かんない）橋」
＝八代市鏡町鏡

「1905（明治38）年に大牟田の実業家の出資で架けられた「太平新橋」
＝八代市二見赤松町

24文化財でストーリーを構成

地域の文化財群が織りなす物語（ストーリー）を文化庁が認定する「日本遺産」に本年6月、熊本県八代市の「八代を創造（たがや）した石工たちの軌跡～石工の郷（さと）に息づく石造りのレガシー～」が選ばれ、全国104件の認定遺産の一つに加えられた。

八代地方には石工が育んだ文化が残っている。江戸時代後期以降、野津石工・岩永三五郎や種山石工・橋本勘五郎をはじめ、確かな技術を持った石工を輩出し、彼らの技術によって石造アーチ橋や干拓樋門、用水路が建造された。その後、特色ある農産物が生産されるようなり、地域に根付いた豊かな文化も育まれた。

「石工の郷」（タイトル略）を構成する要素は、八代平野を形づくった石造りの干拓樋門（ひもん）や石橋群、民俗芸能など計24件の有形、無形の文化財。各要素は左面の4つのストーリーに分類され、近代化する日本を足元で支えた石工たちの活躍を浮かび上がらせている。

八代市東陽石匠館の館長を務めた上塚尚孝会長は、「日本遺産認定によって石造物が全国で注目され、確かな技術を持った石工の存在が広く知られるようになればと願っている」と認定の意義を語った。今後の八代地域の魅力発信に期待したい。

（広報部、写真提供／中村まさあき）

「石工の郷」4つのストーリー

「育まれてきた『石工の郷』の風土」

1 「水島」国名勝。石灰岩を産出する島で「万葉集」に詠われている
2 「白島」天然記念物。八代城の石垣にはこの島の石灰岩が使われている
3 「麦島城跡」国史跡。キリシタン大名小西行長が築城後、大地震で倒壊。石垣に石灰岩が使用されていた
4 「八代城跡」国の史跡。石垣に石灰岩を使用。麦島城の石垣も転用された
5 「美生地区の生姜棚田」文化的景観。石積みの棚田では生姜などを生産

「干拓によってもたらされた平野 ～干拓事業と石工の活躍～」

6 「大鞘樋門群」県史跡。1819（文政2）年の干拓の際に築造された
7 「鑑内橋」市指定文化財。天草産と推定される砂岩が使用されている
8 「岩永三五郎の墓」市指定史跡。岩永三五郎は干拓事業を成功に導いた
9 「文政神社」干拓事業に従事した人々を祭る神社
10 「旧郡築新地甲号樋門、附・潮受堤防」国指定重文。石造10連アーチの樋門は国内最大級。現役の樋門
11 「郡築二番町樋門」国登録有形文化財。1938（昭和13）年建造の石造3連アーチ樋門

「石工たちの技の結晶～めがね橋～」

12 「白髪山天然石橋」市指定天然記念物。伝説が残る天然アーチ
13 「鍛冶屋上・中・下橋」市指定文化財。種山石工の祖、林七のが造ったといわれる石造アーチ橋
14 「鹿路橋」市指定文化財。石造アーチ橋
15 「笠松橋」市指定文化財。壁石に自然石が使われたアーチ橋
16 「谷川橋」1929（昭和4）年築造の石造アーチ橋
17 「赤松第一号眼鏡橋」市指定文化財。高欄の装飾に特徴のある石造アーチ橋
18 「めがね橋群」市指定文化財。丈夫さと実用性重視の46橋が現存する
19 「橋本家文書」橋本家に残る130点もの歴史資料

「石工の活躍がもたらした豊かさ」

20 「い草およびい草製品」干拓地の代表的産品で、国産の約9割が八代産
21 「大鞘節／大鞘名所」市指定無形文化財。干拓労働者が歌った民謡
22 「女相撲」市指定無形文化財。全国的に珍しい民俗芸能
23 「芝口棒踊り」市指定無形文化財。収穫祭などで披露された踊り
24 「ひねり灯籠」石工の加工技術を示す石灯籠

種山石工の祖、林七の作とされる「鍛冶屋下橋」＝八代市東陽町北

1929（昭和4）年架設の「谷川橋」＝八代市東陽町鶴中

石造の干拓樋門「大鞘樋門」＝八代市鏡町両出

地域に根付いた石工の技術

高欄はなく壁石に丸い自然石が使用された「笠松橋」＝八代市東陽町久木野

「鹿路（ろくろ）橋」＝八代市東陽町座連口

「巨樹」写真集を発刊

榊晃弘写真集「九州・沖縄の巨樹～遙かなるいのちの旅～」が7月に発刊された。脚本家の倉本聰氏が序文を寄せ、生命力にあふれ個性的で存在感のある100本の巨樹が収録されている。

石造アーチ橋のルーツを求めて「中国の古橋」の取材中だった榊氏は2011年、福島原発事故のニュースに耳を疑った。安全とされたはずの日本で重大な原発事故が起きた。技術を過信した日本人が利便性を追い求めてきた結果なのではないか、自然に対する畏敬の念を失うと人々の心は荒廃してしまうのではないか…。そうした思いが榊氏のまなざしを「巨樹」へと向かわせたという。

人間の一生の長さとは比べものにならないほど長い寿命を持つ巨樹は、人々の営みを見詰めて続けている。そばに行けば巨樹が何かを語りかけてくれるはず…。榊氏は九州・沖縄を訪ね、幹周り5㍍以上の巨樹を巡り、写真集にまとめた。

榊晃弘写真集
「九州・沖縄の巨樹～遙かなるいのちの旅～」
A4判変型、128㌻、定価4400円(税込)
花乱社 Tel.092-781-7550 Fax.092-781-7555
メールinfo@karansha.com

「中国の古橋」撮影記 その4

榊　晃弘（福岡県）

全長2070㍍の長大石桁橋「安平橋」
＝中国・福建省泉州市　　写真提供／榊 晃弘

治安を意識するように

中国・福建省の長大石桁橋「安平橋」を撮影したときのこと。橋を見下ろす場所を探していると、遠くの丘の上に民家が見える。あそこだ。坂道を急ぎ、住人と交渉して屋上に上げてもらった。遠景を撮るにはいいが、曇天で光が弱い。だが仕方がないと思い、撮影を終えて主人と奥さんに礼を述べ、次の取材先へと向かった。

その翌朝は晴天。昨日の屋上で撮り直したいと思った。予定を変更して20㌔㍍ほど離れた昨日の家へと急いだ。ところが、主人が留守だからと中へ入れてくれない。なぜ今日は駄目なのだろうか。しかしここで諦めるわけにはいかない。ガイドも必死に頼んでくれた。40分ほど待たされた後、娘さんらしい人が家に来て、やっと屋上に上げてもらった。後でガイドに聞くと、この家の主人は作家で、橋に理解があったから中へ入れてくれたらしい。中国では治安の関係で、知らない他人を家の中に入れないことを知らされた。

治安といえば安平橋で、近くに住むという老女にこう忠告された。「暗くなると橋の中に入らない方がいいよ。あんたはカメラを持っているから強盗に襲われるかもしれない。最近は何人かの若い者が観光客を狙っているようだから気をつけた方がいい。この橋は両端以外に出入口がないから逃げられないよ」。それからは忠告を肝に銘じ、治安を意識するようになった。

山東省の「信量橋」では、橋の欄干の一部が盗まれていた。各地で欄干の板石に故事を浮き彫りしたものをよく目にするが、ここではその板石が持ち去られていた。売られたのだろうか。路面は立ち入り禁止になっていて橋の上には入れなかった。橋に施された彫刻が夕日を受けて立体的に浮かぶ日没前を狙い、急いで来たのにがっかりした。

（次号に続く）

「大肥橋」撤去へ工事再開

大分県日田市の大肥橋（1899年架橋）の撤去工事が始まっている。本年5月ごろ川に足場となる仮桟橋が設置されたが、石橋の内部構造が想定外に頑丈であったようで、工事は進展しないまま7月の豪雨に見舞われた。9月になって再び工事が始まったようだ。

撤去は当初、昨年11月と発表されたため10月に地元住民によるお別れの会が催され、橋の右岸側にある神社の石垣に「119年間ありがとう！大肥橋」の横断幕が掲げられた。

工事は1年余り延びたが、予定に変更がなければ、大肥橋は12月までに撤去され、来年3月までに石橋のモニュメントを置いた広場が橋の近くに整備される。（広報部）

上流側に足場となる仮桟橋が設置され、解体に向け工事が再開された「大肥橋」
＝2020年9月13日、中村まさあき撮影

三五郎は八面六臂か（白秋）

薩摩に赴いた岩永三五郎は、石橋の架設、河川の改修、新田開発、港湾修築などの土木事業を任された。鹿児島県石橋記念館の展示解説書によると、それら事業は、藩財政の危機に対し前藩主・島津重豪（しげひで）が調所広郷（ずしょひろさと）を家老に抜擢して推進させた、藩政改革の成功を示す産業振興策だったとされる。調所の用人・海老原清熙（えびはらきよひろ）が監督し、作事奉行や道奉行、郡奉行、勘定方小頭や書役などが関わり、郡奉行見習の待遇で肥後から迎えた主任技術者の岩永三五郎を藩大工、阿蘇鉄矢が補佐する体制で進められた。

甲突川に五石橋を架ける

そのような体制で鹿児島城下を流れる甲突川には、1845（弘化2）年から年に1橋のペースで長大な石造アーチ橋が築造されていった。

①「新上橋（しんかんばし）」4連アーチ、橋長46・8㍍、建設費2415両②「西田橋」4連アーチ、橋長49・5㍍、建設費7127両③「高麗橋」4連アーチ、54・9㍍、建設費2800両④「武之橋（たけのはし）」、5連アーチ、橋長71㍍、建設費2400両⑤「玉江橋」4連アーチ、橋長50・7㍍、建設費1560両―。

おんこせっきょうき

温故石拱記

上塚 尚孝

それらは「五石橋」と呼ばれるようになり、岩永三五郎の代表作として残った。中でも西田橋は、参勤交代の行列が通る街道に架かる橋であったためか建設費が突出していた。

海老原が見た三五郎について、展示解説書には永安橋に残る話が紹介されている。

「性質淡薄寡欲まことに良工なりしは人の能（よ）く知るところにして、水利を視、得失を考え、大数を測るに敏なる所にして、初めて見る地と雖（いえど）（ママ）も神の如（ごと）し」と高く評価している。一方で、「筆算に拙（つたな）き者故（ゆえ）、阿蘇副（そ）うて常に之（これ）を補う」とも。阿蘇とは藩大工の阿蘇鉄矢のこと。

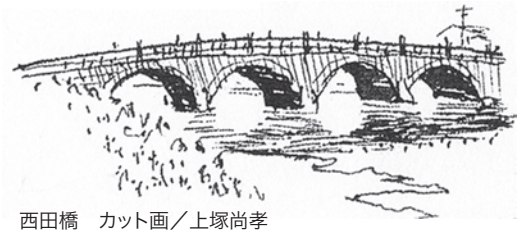
五石橋の工事が進む中、4橋目の武之橋ができた1848（嘉永元）年、調所広郷は幕府から密貿易の嫌疑を受け、12月に自殺に追い込まれる。

解体復元工事の石工頭も脱帽

今から40年以上前、私は鹿児島へ行く機会があり、甲突川の五石橋を徒歩で見て回った。最上流に架かる玉江橋から順に下流へ向かい新上橋、西田橋を眺めたところで、これらは4連アーチのうち川の中央寄りの2つのアーチが左右両岸の各アーチより大きいこと、水切石が意外と小さい三角すいだとの印象を持った。ところが高麗橋を見ると水切石が高く直立しているのに驚いたことを思い出す。増水期を見越しての設計だろう。

その後、1995（平成5）年8月6日の水害で武之橋と新上橋が流失してしまう。五石橋のうち残った3橋について鹿児島では現地保存か解体移設かで激しく意見が対立したが、最終的に鹿児島市の石橋記念公園に移設保存された。

公園が開園した2000年、日本の石橋を守る会に「渡り初め」の招待状が届き、私は西田橋の解体復元工事で石工頭を務めた竹部光春氏（熊本県出身）と一緒に同橋の路面を歩いた。竹部氏は石工頭として熊本・美里町の霊台橋修復工事を担当した経歴を持つ現代の名工。その竹部氏が私に「岩永三五郎はな、天才ですばい」と語られた。



西田橋　カット画／上塚尚孝

西田橋の外観は、輪石が二重になっているように輪石の外側を輪石よりやや厚みのない壁石が囲み、袴石（はかまいし）の上の壁石は扇を広げたような形状に整然と並んでいる。これらの外観の特徴は五石橋に共通した構造美であり、中でも西田橋の壁石は、石材表面が仕上げ鉋（かんな）をかけたようにきめ細かな出来栄え。路面は長い板石を斜めに敷いた粋（いき）なデザインで、銅製の擬宝珠（ぎぼし）を被せた高欄の手すりは円柱状に加工され、堂々とした風格を備えている。

河床には、大雨の際の洗掘を防止し石橋の経年沈下を防止するため、松材を梯子（はしご）状に組んだ「梯子胴木」が橋幅の3倍幅に敷かれ、その上に「護床敷石」が敷き詰められていた。三五郎はやはり八面六臂の人物だと納得。

竹部氏も岩永三五郎の周到さに脱帽されたようだが、高欄をなでながら「工事費が高ければ石工は、それ相応の仕事ばするもんですばい」と談笑された。

（2020年4月7日記、次号に続く）

掛橋の石橋（福岡県嘉麻市桑野）
YouTube動画「幻の石橋」（福岡県立朝倉高等学校HPより）
http://asakura.fku.ed.jp/html/club/historicalscience.html

§福岡県立朝倉高等学校
高校生がリブアーチ橋調査

福岡県嘉麻市桑野の遠賀川源流域近くには、全国的に珍しいリブアーチ式の「掛橋の石橋（仮称）」（橋長約9㍍、橋幅約2・4㍍）がある。普段はやぶの中に隠れたこの橋の輪石は縦長の石材5列が5石並ぶ扁平なリブアーチ。壁石は拱頂部のみ切石が1列連なるが、両岸近くには丸い小石が多数使用されている。

地域に眠るこの石橋について、福岡県立朝倉高等学校（荻野幹生校長）2年生の中原透也（とうや）さんらは史学部（顧問・泉信至教諭）の部活動として調査を進めている。昨年12月には発表会を開き、発表内容を動画投稿サイト「ユーチューブ」で紹介。さらに住宅地図を刊行する「ゼンリン」にも働きかけ、嘉麻市の2020年度版地図に石橋の場所が表記された。そうした話題（毎日新聞記事）が6月にネットニュースで取り上げられ、その後はラジオやテレビでも紹介されるようになり、高校生の活動が地域住民にも注目されている。

10月24日㈯14時には「ピーポート甘木2階視聴覚室」（朝倉市甘木）で発表会「奇跡の石橋～幻のリブアーチPART2～」が予定されている。入館料は無料で誰でも発表を聞ける。（広報部）

第41回大会を中止

事務局長　軸丸 英顕

福岡県八女市において5月24日～25日に開催を予定していた第41回大会は、新型コロナウィルス感染拡大のためにやむなく中止いたしました。大会を楽しみにされていた会員の皆さまには申し訳なく、開催の準備にご尽力いただいた「八女上陽の『ひふみよ橋』を守る会」の皆さまには大変お手数をおかけする結果となってしまいました。紙面をもって謝意を表します。

ネットを利用し緊急理事会開催

総会で審議を予定していた内容については熊本地震の影響で中止した第37回大会に倣い、また感染に配慮してインターネットを活用した緊急理事会を開催して審議しました。なお中止決定時点での大会出席予定会員22人に対し委任状提出会員は87人に上ったため、議決に必要な数である会員総数（個人161・団体3）の過半数に達しています。

本会の本年度予算額は56万7000円。繰越金のほか主な収入は会費で、主な支出は会報発行や大会準備などに関連する費用です。役員手当の計上はありません。別途、石橋の魅力を伝え石橋を守る活動支援のための「石橋文化振興基金」に100万円を保管しています。

本年度は多くの会員が集う活動の実施が見通せない状況なので、当面は基本となる石橋情報の収集、会報やホームページによる広報活動をしっかりとやっていく予定です。なお、本会大会に併せて開催が予定されていた「寄口橋架設100周年記念行事」は、来年3月に開催が延期されました。詳細が分かり次第お知らせします。

来年度大会は熊本県八代市へ

来年度の大会開催地は、「石工の郷」として文化庁の「日本遺産」に認定された熊本県八代市を軸に調整中です。今後も石橋を愛し石橋の魅力を伝える活動にご支援やご協力をお願いいたします。

編集後記（お知らせ）

「令和2年7月豪雨」で被災した石橋の情報があればお知らせください。

▽koho@ishibashi-mamorukai.jp

会報担当・中村まさあき

会報96号の4カ所に訂正がありました。

1面本文2段11行目
「設計」を**「監理」**に訂正

4面本文1段4行目
「佐賀藩諫早領主の出資、」を**「佐賀本藩と諫早領主の出資、」**に訂正

4面本文1段6行目
「銀3000貫（現在の10億円ほど）もの費用をかけて」を**「銀高30貫目余り（諫早家文書）の費用をかけて」**に訂正

7面本文4段16行目
「国分村」を**「国分小村」**に訂正

日本の石橋を守る会
～石橋とその文化を大切に～

会報97号（通算）　2020（令和2）年9月29日発行

代表者　会長　上塚 尚孝
事務局　〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
　　通潤橋史料館内　☎0967（72）3360
HP　http://www.ishibashi-mamorukai.jp
BBS　http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/